能力名はT.N.K.

ひょうきん者によろしく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
能力名は　Ｔ．Ｎ．Ｋ．

【Ｎコード】
Ｎ７７２７Ｘ

【作者名】
ひょうきん者によろしく

【あらすじ】
はい、どうもこんにちは。これは、２０世紀に超能力があるっていう設定のお話。
さて、この小説には、そんな能力アリなの？　審査員呼んじゃうよ？　な能力が
登場しちゃうけれども、怒らずに、保温設定の給水機並みの目でご覧ください。

プロローグ、まあ、中心人物の紹介―（たぶん）（前書き）

はじめに。

僕の小説（未満もとい妄想）は「なんでこんな主人公はいないんだろう」が出発点です。

プロローグ、まあ、中心人物の紹介一（たぶん）

２０世紀日本には、あるものが、一般的に普及していた。

「提出物、出してねえ！　」

机についた少年の隣りを誰かが通り過ぎていった。
いや、何か黒い影が、一瞬みえた。
ほら、エレベーターの扉が開いた一瞬に、あるいは、ふと部屋の隅に一瞬見えて、気のせいで済ませる、アレ。

あ、わかんない人はスルーしていいよ。

ボ。

前方に炎があがった。

「こら、教室は火気厳禁。」

教員が注意をする。

「すんません。…俺は、こいつのが伸びてきたからイギリス式のバーバーをしてやろうとしただけなのに。」
彼の指先で炎が揺れていた。
「絶対、根に持ってるだろ。」
された側はそうも思わないらしい。
事実、耳の産毛どころか、首から上が焼き鳥になってただろう。
さて、ここでこの話の中心人物はというと。

少し巻き戻してみよう。　じいいいいいいいい。

「絶対…」　もっと前。
びゅううううう。
「…からイギリス式のバーバーを…」もおちょい。
机についた少年の隣りを誰かが通り過ぎていった。
ストップ。ココ、ココ。
いや、速い彼のじゃないよ。
誰って。
そこに座ってるヤツ。

通称　田中。
成績中くらい。
にしがみついてるカンジ。
体力平均。
…下。

彼のクラスには
電気出したり、発火しちゃったり、メチャクチャ速い、タリラリラーなパパの後輩の息子さんみたいなのもがいる。
何って、いわゆる、超能力。
それは一般的なものであって、ほかにもいるよ。
さて、先ほどの彼はというと。

通称　田中。
能力　未発現。

…
あ、つまり、ない、ない、てことなんだよね。

それだけならいいけど、彼は幼稚なんだよね。

劣等感持っちゃってさ、色んなものを捻じ曲げて解釈してしまうようになったんだよね。

目の前の微笑みを嘲笑ととらえたり。

目を見てわかる人って、すごいことなのに、半人前でそれをして、何も見えないのに、こいつは裏で何考えてんだ、て疑ったり。

イタイひと、近寄りがたい変人。そうなっちゃったんだね。

それを見かねた去年の担任の先生は、彼に教えた。

木を見ずに、森を見ろ。

お前は優しい、けど思いやりが足りない。

自分を見つめろ、そして自分で考えて、自分を創っていけ。

彼は衝撃を受けた。

その日から彼の雰囲気から刺々しさが少しだけなくなった。

今日は　俺の誕生日だ。

俺は昨日のテレビの内容を思い出した。

真面目なバスの運転手のおっちゃんが、いきなり演奏しだしたサックス奏者の客や道を塞ぐデモ行進にハラハラするが、

自分の誕生日の歌を歌い出したことでサプライズだとわかり、笑顔をみせるというものだった。

さて、帰るとするか。

ポン。

！

ハッピバースデー　トゥーユー。　ハッピバースデー　トゥーユー。

ん？　なんだなんだ。
どこのやつか知らんが俺までウキウキするな。

コト。
目の前に掌サイズのシナモン香る、ケーキがおかれた。

ハッピバースデー、ディア　優真。　ハッピバースデー　トゥーユー。

拍手されている。

そこは突っ込むべきところなのかもしれない。　しかし、実際に起きればそんなことは気にならず、
ただ、ただ、嬉しい。
俺は、口の端が、若干持ち上がっているのを感じた。
目を細めていた。
目の前に、四人、誰かが立っていた。
すぐ目の前には、ありふれたグレーのネクタイ，スーツに誰にも反感を買うことがなさそうな、短すぎず、長すぎもしない髪。
その左隣に高い帽子がトレードマークのコックさん。
反対にはウェイトレス。
もう一人はサンバイザーを付けて、カメラを回していた。
全員何故か女性だった。
彼らを惚けて見回していると。
「ほら、何ぼうっとしてるの、火、火！」
目の前にいた人に急かされて、ふううううううううう、と吹いた。
拍手がまた響く。

悪くないなあ。
一言言った方がいいかな。

「いやああ、本当にありがとう。まさか誰かに祝ってもらえるとは、少なくとも学校では思わなかったなあ。
こりゃあ、次はあるかわからないから、忘れることはないねえ。」

「ほら、ケーキ食べたら。」

その後、年が少し上なコックさんに感謝すると、がはは、とオヤジ臭く笑った。

プロローグ、まあ、中心人物の紹介―（たぶん）（後書き）

まだ、わけわかんなくて、いいです。二話目もよろしくお願いします。

設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について―（次からやるよ、本当だ

まだまだ中心人物について続くから，今回は二本立て（二本投稿）！
次からやります。マジです。

設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について―（次からやるよ、本当だ

誕生日の日は、悪くなかった。
今日は若干、気分がましだ。
「　よう、田中。」
こいつは、船山（ふねやま）、自称親友だったやつ。
最初っからその気がないのはよくわかる。ぱしりを断った後日にだったからよくわかる。
「お前、なんか昨日あったそうだな。」
「え、あんた、もしかして俺の誕生日知ってる？　」
「　え、田中、お前誕生日だったの？　おめでとう。」
こういうヤツはほとぼりが冷めたら（そう本人が思っている）特になんてことはなかったりする。

じゃあ、と教室前でわかれた。

その日の昼休みだった。

「　ねえ、田中、どうして田中ってうまれてきたの？」
二枚（にまい）　瞬（しゅん）が、大きな呟きをなげた。
トイレでの出来事だった。
前の俺だったら、無意味な反撃をして、つまらないけどキツイ攻撃を精神的にも受けたかもしれない。
俺はそのまま立ち去ろうとした。

ガシ。

「おい、無視すんなって。」
引き戻された。

殴る姿勢をとったため防ごうとする。
向こうはこちらの反応をみて、ビビってるビビってると、挑発してくる。
向こうが拳を引いたので防ごうとするが。
足を持ち上げるように、ロウをはなってきた。
膝を上げて、ふくらはぎと腿で受けるが、痺れる。
ヤツの拳が、こちらの腹にめり込んだ。
う、となる。
膝を二三度いれると、ヤツは、田中よわ、死ね！　と一言残して立ち去った。

ああ、気分が悪い。

ああ、つまらない。

やはりこうなるのか。

俺はこうして常に誰かの気まぐれに振り回されていかなきゃならないのか。
俺も悪い、あの教師だって言っていた、オレでも虐めたくなると。
これからは俺も自分のことをしっかりわかって、変えなくてはいけない。
そう思いつつ、俺は教室へ向かった。

設定紹介ではないけれど、まだまだ中心人物について―（次からやるよ、本当だ

田中についておわかりいただけましたか。
次回もよろしくお願いします。

では、また来週。

やっぱ待てねえ、中途半端だと思うので進めるよ！（前書き）

自分でもアレは、母さん世代の路上紙芝居よりも切りが悪いと思ったので、
次いきます。

やっぱ待てねえ、中途半端だと思うので進めるよ！

それは帰りのことだった。

歩いていると向こうに男子バレエ部員らしき後輩たちの集団が歩いていた。

目が合うと、なかでも最も長身で茶髪（生まれつきだとおもう、たぶん）なやつが、にたりとした笑みで

周りに何やら話しかける。

たまに話していたサブカルな知り合いの話に二枚、他数名が後輩に俺の話をしていたから注意しろ

というのがあった気がした。

俺は普通に通り過ぎようと思った。

遠くから見ても二枚目で、女子とも仲がいいらしい（登校口前で見かけた）。近くに来ると１７０は、あった。

身長は仕方ない。俺は１６３だ。

俺はクールな主人公みたいなやつではなく。

世界を救う英雄、国を統治する優秀な為政者、永く語り継がれる伝説に、

…なりたいけど、実際は婦人の尻を蹴飛ばしたり、子供からアメ玉をちょろまかすことが

せいいいっぱいな、喜劇王を目指したい。

わかるひと、いたら嬉しいよ。

擦れ違う時だった。

ガ。

足を引っ掛けてきやがった。
振り返ると彼らはこちらを向いて嘲笑していた。
俺はそのまま立ち去ろうとした。
が、あることを思い出した。
これはもともとの内容は忘れたが、情報に関する本に、
相手と会話するうえで重要なのは、知識も能力もそうだが、それ以前にもっていなければならないのは、
自分の尊厳を傷つけられたときに、怒れることである、とあった。
相手である、長身茶髪のやつは目の前にいた。俺は、怯えを隠して、尻に蹴りを入れた。
…そして逃げた。
小物な俺にピッタリなやりかただ。
ああ、情けねえ。
そう思いつつ、振り向く。
ごおおおおおおおおおおおお。
蒼い。
そこには白い道着の格闘家も真っ青な、わけのわからないものが、道の両脇を粉砕しながらこちらに迫っていた。
超能力社会に生きるってこういうことか。

俺も超能力を使った争いの見物はしたことが何度かあった。
野球に興味がない人と一緒で、何がどうとかは、さっぱりだ。
でもこのとき俺は思い出した。
炎操作能力者に対して、物理的念動力者が張ったシールドを。
俺はできないとわかっていた。
でも気が付くと右手を前に出していた。

やりたかったな、超能力。

やっぱ待てねえ、中途半端だと思うので進めるよ！（後書き）

何とか漫画雑誌並みの区切りができましたか。
次回お楽しみに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7727x/

能力名は T.N.K.

2011年10月22日03時19分発行